

令和五年一月五日(木)

兼題『餅』一切(鏡餅は不念)、席題『日』

新年になり最初の句会を、日本倶楽部にて開催。

松田 一文字

勤行の堂に木霊す霜の朝

湯に浸る猿の頭の雪化粧

ゆずの香に長湯となりぬ冬至の夜

餅を搗く男の息の白さかな

冬蝶のふうはり浮いて佳き日和

中村 晃也

冬日差す犬小屋に猫のうのうと

反り返る猫たつぷりの冬日差し

切り餅をコンビニに買ふ独り者

西は丸東四角の餅を焼く

禅問答終へし老師のちゃんちゃんこ

高橋 由紀子

真暗き中戦禍の国も年明けぬ

冬夕焼け過疎の団地の商店街

冬暁や群れ鳥湧きて又わきて

二人居の食べきらぬ餅棚の隅

白鷺を朱色に染めて冬入り日

森田 元斐

遠来の鴨をもてなす多摩の川

スマ木繰る信号待ちへ石焼き芋

過疎村に寒搦き餅の合いの声

鉄橋を揺るがす始発冬ざるる

寒椿千日行の谷深し

大津 そうかい

仕舞ひ湯や足に触れたる柚子の種

枯蓮や背の痒みに届かぬ手

八十年急きし詰りの日向ぼこ

寒風や眼鏡曇らす掛けうどん

餅切や父の手許を子ら凝視

宮原 凧

定規当て餅切る父は理系なる

初夢や逝きし母友みな若く

一つ焼き一つ楽しむ餅を焼く

寒月やライブステージ平家琵琶

十二月余白の多き日記果つ

浜口 須美子

冬の日に動かしてみてる己が影

現世と常世行き交ふ残る虫

遠き地の息子も見るか冬の月

皆寄りて捏ねる機械に踊る餅

嫁の地の雑煮で明ける椀の湯気

新田 ゆふき

犬小屋の鎖力となる霜夜かな

一口の切り餅祝ひ端座かな

着ぶくれて団栗を踏む踵かな

姫入水池の際なる薄氷

押し寄せて急きて過ぐる日年の暮

長尾 進一郎

大掃除年越し蕎麦で打ち切られ

初詣世界平和の願い増ゆ

餅つきの力こもれり若社長

枯れ庭にひとり八つ手の緑濃し

凍つ道の朝日に背中押されけり

内藤 まりこ

石臼と杵で餅つき初体験

風呂吹きの子子酢味噌の味ピリリ

年の瀬のバスに赤子の泣きじゃくり

日めくりの今日は浮き立つクリスマス

裸木となり青空の冴え冴えと

首藤 しずを

一隅を照らして温し冬董

日輪の輝き優る今朝の春

びらびらと靡く冬日をふと見たり

歳晩の路地いつぱいに餅つきぬ

底の粉指先になめ黄な粉餅

安藤 晃二

丘傾り被ひ尽くして散紅葉

搗き立て餅温きを千切り餡の良し

デパ地下の長蛇に並び今川焼

到来の新蕎麦待たせ大晦日

山査子の紫の寂ふ十二月

志村 良知

三日月の懸かりて肅と枯木立

餅搗きや蒸籠の湯気の濛々と

冬至日輪遠く箱根の山裾に

鏡餅二寸の径に願数多

磨き上ぐ硝子に写る雪の富士

西川 知世

歳の市並びに桶屋刃物研

冬うらら穂先擦り減り竹箒

きらきらと日の斑を弾き冬の水

餅焼くやテレビに現世の戦争

鴉来て朝を騒げる冬旱

次回は令和五年二月二日（木）、

兼題は冬の季語「霜」（松田一文字さん出題）と

「雪」（次点中村晃也さん出題）、席題は西川知

世さん出題の「節」（読みは「せつ」でも「ふし」

でも可）です。